



▼言葉の力▼

校長 小田 恵

先週、日本の元総理大臣が公道で演説中に銃撃され死亡する、という衝撃的な事件が起こりました。人の命を奪う卑劣な行為は許すことはできません。事件の後、犯人についてや、警護のあり方などがあれこれ取り沙汰されていますが、そもそも今の世の中で、わざわざ危険を冒し、経費・労力を顧みず、現地に赴き直接人々に語りかける必要があるのか、という意見もあるようです。それが選挙の応援演説かどうかは別として、演説とはそれによって世界を変えるほどの力を持つものである、というのは歴史が証明しています。

遡って2千年前、イエス・キリストは各地で「説教」を行いました。そしてキリストの死後、聖パウロをはじめとし弟子達は迫害の中、各地を旅して「説教」を行い、キリストの教えを伝道しました。「説教」というと、現在の教会やお寺、または集会所(教室も?)で行われるように「聞き手」に向かって講師的な存在が口頭でありがたい言葉をたれる、というイメージですが、当時はおそらく、選挙期間にみられる街頭演説のようなもの、いや、それよりもむしろ例えばロンドンのハイドパークである「Speaker's Corner」での演説のようなものであったかもしれません。円山公園のしだれ桜の下で、いきなり誰が熱く人々に向かって語り出す光景を想像してみてください。変な奴だから関わらないでおこうと見ぬふりをして通り過ぎる人が多い中、道行く人の足をとめ、耳を傾けさせるためには、声の大きさ、イントネーションなどの口調、しぐさ、そして言葉の使い方(修辞)が重要でしょう。キリストや弟子たちの言葉のなかにはよくパラドキシカルな表現が見られます。「貧しい人は幸いである」「あなたの敵を愛しなさい」などは、何を言っているんだ? この男は! と足をとめ、どういうことなのか理解しようと耳を傾けさせるのに十分な、ある意味挑発的な言葉です。当然反発も強かったでしょうし、石を投げて傷つけられる、もしくは囚われる危険も多分にあります。しかし、この言葉が、生きている人の声で、同じく生きている人に向けて発せられるからこそ、力強いメッセージとして伝わり、時代を超えて残るのです。

言葉の力——これはなにも演説だけでなく、「語り継ぐこと」においても明らかです。戦争体験や被災体験の「語り部」活動がいかに重要なのか、私は先日の団体鑑賞で再認識いたしました。7月6日に中高4学年で鑑賞した「あの夏の絵」という演劇は、「記憶の継承」をテーマとして創られた舞台でしたが、文字からだけでは感受できないものがありました。

舞台上の人々から発せられる言葉が、言葉以上の力を得て、客席の私たちに押し寄せてきたのです。生徒たちにとっては、多くの事を感じ、考えるかけがえのない時間となりました。

「言(ことば)は神であった。」というヨハネ福音書の冒頭の重みを改めてかみしめています。